

飛天のきた道概要（平成23年6月25日奈良県文化会館にて）

仏像の世界は色々な文化を取入幅ひろい 私は色々な仏様を作って来たが特に天に惹かれます
天は自然を擬人化したものが多い（例えば弁財天たとえば；サラスバーティ河）

天の内特に飛天を大きなテーマにしています 飛天とは空を飛ぶ天人という事です
空を飛びたい、空の向こうには何かがある飛んで行ってみたいというのは人類共通の思いです
そこで様々な飛天が生まれました

翼で飛ぶもの、

裸で飛ぶもの、

薄い衣（天衣）の力で飛ぶもの

男、女、子供、カップルで飛ぶもの

1. 私の知っている最も古いものはエジプトのツタンカーメンの墓に有った絵です

翼を広げツタンカーメンの棺を覆うような格好をしていますこれは女神イシスとおもわれます
エジプトでは冥界の王、オシリスと幸福の女神イシスの間に生まれたホルスはハヤブサです
怖い怖い存在でそのハヤブサの翼を持つ女神です通常は翼はありませんが墓所では翼が生えます



ツタンカーメン王の壁画
のイシス女神



長い翼のついた両手で死者を守っています

この飛天は立っているか座っているかどちらかで飛ぶ姿は有りません（BC1300年）

2. 地中海を隔てたギリシャにはニケとエロスがいます

一般にはルーブル博物館にあるサモトラケ島のニケ（BC200年）が有名ですが

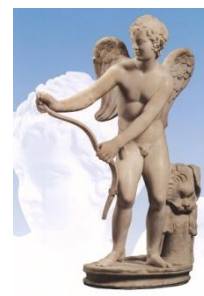
このオリンピアのニケには翼、両手、顔は有りませんが非常にきれいでまさに着地寸前の姿です



オリンピアのニケ



ゼウス神に手にのるニケ



エロス神

オリンピアで行われた競技の勝者にオリーブの冠を与えたとされています

ニケは勝利と幸運の女神です

子供の飛天としてはエロスがいます エロスは金と鉛の矢を持つ愛の神様です

この2人の翼を持った飛天はアレクサンダー大王の遠征とともに東へと向かいます

アレクサンダー大王はBC300年頃ペルシャのダリウス大王を破りその結果

エジプトからインド・インダス河に及ぶ大帝国を作りました

大王は征服した地にアレクサンドリアという都を作りギリシャ人を移住させギリシャとその地の文化との融合をはかりました

大王は若くして亡くなりましたがその意志は彼の将軍達に受けつがれました (ヘレニズム時代)

それに従いこの翼を持った飛天は東へ飛んでいったのです

3. ヘレニズムの飛天



トルコエフェソス遺跡のニケ



イランの翼をもった飛天



タクラマカン砂漠

ミーランの飛天

これら翼を持った飛天はミーランから東にはあまり見られません

キリスト教、イスラム教にとりいれられエンジェル、キューピットとなり西方 (ヨーロッパ) に向かったとおもわれます

4. 一方インドは古くから石像彫刻が盛んで独特の飛天がいます



インドエローラ石窟寺院の飛天



天衣をつけた飛天

天空を駆けあがるような飛天がおおく裸体か天衣をつけています

ここでは女性は薄い衣 (天衣) を着ています (AD600年頃) いよいよ羽衣の天女の登場です

インドの飛天は西方の飛天と違いという翼という物理的な力ではなく思考の力で空を飛ぶのです

5. 説法をするお釈迦様の飛天



飛天
拡大図



サルナートの初転法輪の釈迦

ガンダーラの説法をする釈迦

光背には裸体の飛天がいます

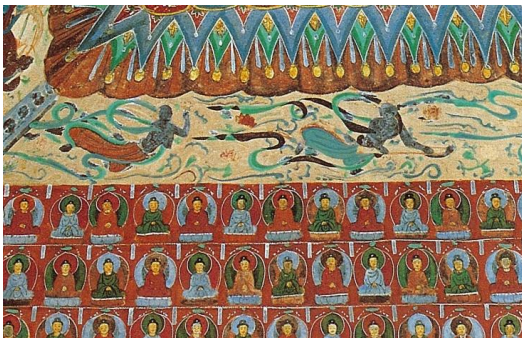
頭上には翼を持つ子供の飛天がいます

同じ説法図でもガンダーラの飛天は翼がありサルナートの飛天は翼がないのです

ここでは西方とインドの文化が入り混じっているのです

これから飛天は仏を賛美するという役目をあたえられシルクロードを東へ飛んで行くのです

6. 中国の飛天



敦煌莫高窟の飛天



雲崗石窟の飛天

インドの飛天と異なり下半身は衣で覆われ中国化していきます

神仙思想の影響を受け仙女のような形となっていきます

エジプトから飛び立った飛天は通過する国々の影響を受けインドで翼を取り神通力で飛ぶ衣

に着替え中国では体を衣で覆いそして最終駅の奈良の都に飛んでくるのです

そして法隆寺の天蓋、薬師寺の東塔の水煙の中に生きているのです

7. 薬師寺水煙の飛天



会場に私の先生松久宗琳先生の水煙、ギリシャの飛天ニケ、中国の仙女、法隆寺の天人、東塔の水煙の飛天を陳列しています